

ヨーロッパの自然観

坂本賢三

ここでヨーロッパというとき、「ヨーロッパ」なるものの成立した中世以降に限定して用いる。「ヨーロッパの自然観」といえば、東洋や日本と対比して一色のものがあつたかのように見えるが、現在これらと対比して呼ばれているものは、十七世紀以後の近代科学と結びついた自然観を指すことが多くて、これでは「近代ヨーロッパの自然観」に過ぎず、それが「ヨーロッパの自然観」のすべてであるとするのは一面的であろう。それはほんの四百年ほど前に始まったものにすぎないのである。

ヨーロッパの自然観といっても、地域や時代によって大きく異なっているし、階層や宗派や職業によってもさまざまであると言わなければならない。地域的に言えば、アルプス以南と以北、イ

ペリア半島とピレネー以北では違っていたし、平地と山地では違っていたであろう。時代的にいえば、十二世紀まで、十六世紀まで、十七世紀以後と大きく三つの時代に分けられると思われる。職業でいえば、神学者や哲学者と農民・化学技術者・建築家はそれぞれ異なつた自然観を抱いていたと見られる。

「ヨーロッパ」成立以後のヨーロッパはキリスト教世界と云つてよいのであるが「キリスト教的自然観」といった一つのものがあつたとは軽々には言えないのである。聖書の『創世記』に見られる自然観はたしかに底に流れてはいたが、『創世記』そのものが複数の自然観から成り立っていて、たとえば祭司資料とヤールウエ資料では違ふし、エロヒム資料ではさらに一層違っている。こういうわけで、聖書の自然観を一つのまとめたものとして取り出すことすら困難なのであるが、その上、中世以後のヨーロッ

パのキリスト教は聖書をそのまま受け入れてはいない。ヤスパー
スが聖書の宗教とキリスト教とを区別して取り扱ったのは根拠の
あることなのである。

しかし、このように相違を見て行くと「ヨーロッパの自然観」
について語ることができなくなるので、思い切って細かいニュア
ンスの差を捨象し、種々の自然観をまとめて行くと、大きく三つ
の基本的なタイプが見出されるように思われる。

二

第一は、伝統的に「プラトン主義」と呼ばれてきたもので、プ
ラトン主義といってもプラトンそのものの思想ではなく、プロチ
ノスなど新プラトン派の思想や、最近注目され出している中期プ
ラトン派 (Middle-Platonists)——一、二世紀頃のピュタゴラス風
プラトン派) や東方思想の影響も受けた思想的伝統である。東方
思想としては明らかにエジプト神話やペルシア宗教思想の影響も
含んでいる。

それはイデアの世界 (光の世界・一者) を前提し、自然をその
模倣とみる。あるいは自然をそこから溢れ出てきたものとみる。

この立場から見られた自然は、つねに影の世界であって真実相で
はありえず、自然研究は自然の個々の細目の研究ではなく、自然
という影の世界に映し出されている真実相・永遠の相を見てとる
ことである。このような自然の真の姿 (それは美ととらえられる)

を見得るのは限られた人だけであるから、いきおい秘教的性格を
持つことになる。またイデアの世界に近いのは数学的世界である
から、自然の中に見出される理念的な図形や比の研究が自然研究
の中心になり、数学的思考が特に重んじられる。

光の世界はこの自然の外にある。天体・天球を含めてこの世界
はすべてそこから流出ないし創造された世界であって、天には神
神が住む。この神々は (一神教では天使と呼ばれるが) 各天球の
駆動者であり、それが地上の人間に影響 (Influence——天体から
発する *effluvia* が「流れ込む」こと) を与える。この自然は天と地
が感応 (correspond) し合う世界である。感応は共感 (sympathy)
と反感 (antipathy) の両面を持ち、それによって自然物は相互に
結合したり反発し合ったりする。占星術や錬金術の自然像もこの
タイプに含まれることになる。

このタイプの自然観にはもう一つ重要な性格がある。それは天
からの作用を認識し、それをコントロールすることによって自然
に働きかけようとする態度である。これは或る場合には魔術とし
て、また錬金術として現われるが、自然を変ええることのできる対
象とみている点が注目されるのである。

ヨーロッパではこの自然観の洗礼を二度受けた。一度目は、ア
ウグスチヌスが (魔術を注意深く避けながら) 聖書と結びつけて
キリスト教神学を形成したときであり、その後、ディオニシオ
ス・ホ・アレオパギテウス (偽ディオニシウス・アレオパギタ) や

エリウゲナを経て、キリスト教神学の支配的な自然観となった。二度目の波は、十五世紀にビザンチンからヨーロッパに入り、ルネサンスの主要な自然像を形成した。この二度目の「プラトン主義」は、当時プラトンの祖師と考えられたヘルメス・トリスメギストスの名をとって「ヘルメス主義」とも呼ばれる。当時の少ながらぬ科学者たち、コペルニクス、パラケルスス、セルヴェトゥス、ギルバート、ブルーノ、ピコ・デラ・ミランダラ等がこの自然観の影響を受け、十七世紀以後にもケプラーやニュートンのほか、ケンブリッジ・プラトニストやモーツァルト、ゲーテなど、またロマン派の自然観にも影響を与えている。

三

第二のタイプは「アリストテレス主義」と呼ばれているが、これもアリストテレスの自然観そのものではなく、彼の名と結びつき、その注釈として形成されてきた思想的伝統である。

これはイデアを単なる名称に過ぎないとして経験的自然を重視する。しかし自然を単に物質（質料）と見るのではなく、質料と形相が一つになったものとみる。形相（自然の中の形相は「実体形相」と呼ばれる）は魂のようなものであるから、自然は生きものである、有機体と見られることになる。生きものであるから自然物は各々が目的を持った動的過程の中にあり（目的論的自然観）、静的・永遠的な数学的思考を採用しないから、自然をもつばら質

的に考察し、運動も質的变化において見ることを特徴としている。さらに経験に密着しようとするので、真空を否定し近接作用のみを認め、あるべきように変えるよりもあるがままにとらえようとする態度で自然にのぞむことになる。

この自然観は十二世紀に主としてアラビア語からの翻訳を媒介として盛んになり、オクスフォード学派やパリ学派を経て、トマス・アクイナスに至って自然研究に大きな影響を及ぼし、スコラの根幹的自然観となった。法則概念の形成や自然の光（理性）による自然認識の確立に貢献したのもトマスである。十七世紀のいわゆる「科学革命」によって、フィジックとしては衰退したが、有機体論的自然観であるから医学や生物学では有力な思想として生き残り、十九世紀には歴史主義と結びついて進化論的自然観の思想的背景となった。

四

第三のタイプは、アトム論的・要素論的自然観で、一応「デモクリトス主義」と呼んでおく。

この自然観は、第一、第二の自然観に見られた spirit や実体形相などの内的性質を排除して自然をどこまでも物質・物体として扱い、天球の概念を否定して無限の空間の中での位置の変化として運動を扱う。質的变化は我々の感覚と関係する限りでの「第二性質」に過ぎず、究極には量的変化に還元されるとする。自然を

空間的・幾何学的にとらえるのである。

この自然観は中世には影響力を持たなかったが、十六―十七世紀にプラトン主義を媒介にしてアリストテレス主義を克服し、近代科学の自然像となった。ガリレオ、デカルト、ホイヘンス、ボイルらがこの自然観の形成と推進に寄与したが、自然の内的な力が見出されてきた蒸気機関の開発とともに衰退し、十八―十九世紀には「アリストテレス主義」が勢力を持った。しかし、二十世紀に復活し、医学や生物学にも浸透して現在もっとも有力な自然観となっている。第一が窯業・冶金、第二が農業牧畜をモデルにしているとすれば、第三は機械工業をモデルにする自然観である。

五

こうして見ると、自然を単なる物質（質料）と見るのは近代以後の特徴であって、ヨーロッパの自然観の代表とは言えない。しかし、質料と形相（魂）の枠組で自然をとらえようとする点は一貫していて、ここにヨーロッパの自然観を見ることもできるであろう。第一の自然観では、魂（プシケ、アニマ）は光の世界の存在つまり霊（プネウマ、スピリトゥス）が物体・身体（ソーマ、コルプス）にとりこまれたものであり、第二の自然観では、魂が質料に生命を与えるものであり、第三の自然観では、魂は人間のみに所属せしめられて自然は質料（材料・物質）に過ぎなくなつた。ヨーロッパの自然観は、いわば、自然からまず霊が排除され、

ついで魂が排除されてきた歴史であるといつてよいのである。この過程は別の言葉でいえば、自然と一体になっていた人間、人間と一体になっていた自然から、人間を主体、自然を客体とする、人間と自然との分離への過程であったといつてよいであろう。（この点では人間（我）と自然（宇宙）の一体化を理想とするインドの自然観や老荘思想の自然観と対蹠的であるといつてよいであろう。）

しかし、いまヨーロッパでは、自然観のこのような歴史的方向に反省が加えられているように見える。自然との再結合、自然と人間の一体化をめざす傾向がさまざまな形で現われてきている。しかしヨーロッパの自然観とくに第三の近代ヨーロッパのそれは、いまや世界の自然観となっており、とくに第三世界で著しいが、そのもたらすものの問題点も明らかにようになってきている。いま、ヨーロッパの自然観は曲り角にいたのである。

（さかもと・けんぞう、科学思想史、神戸商船大学教授）